

中央アジアのメロン遺伝資源紀行

カザフスタン・ウズベキスタン・トルクメニスタン

芦澤正和 元野菜試験場室長／元全国農業協同組合連合会技術主管
秋濱友也 アグリバイオ研究所／元明治大学教授

前号(本誌15号)では、ロシアのサンクトペテルブルグにおける植物生産研究所と植物遺伝資源に関する偉大な業績を残したN.I.バビロフ博士(1887-1943)について述べた。

本号では、彼の足跡を追って中央アジアの遺伝資源、なかでもわが国で高級果物として重要性が高いメロン(*Cucumis melo* L.)に絞って紹介しよう。

中央アジア5カ国というのは、カザフスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタン、キルギスタン、タジキスタンである。とくにここで取り上げるのは、地図上ではロシア連邦に長い国境で接するカザフスタンと、その西側にあるウズベキスタン、さらに西のカスピ海に面するトルクメニスタンの3カ国だ。

この3カ国は東西に連なった位置関係にあり、モンゴル・新疆・ウイグルから続く砂漠、草原地帯である。メロンの生育期においては、日中の気温が40℃以上になるが、夜間は20℃以下まで下がり、この厳しい温度差が高糖度で高品質な果実を産するのである。

一方で、日本の気候は温暖であるため、そのまま生産したのではダイコン並みと酷評されてしまう。つまり、耐干性、高品質などの優良遺伝子は品種改良上、必須の形質なのである。



日本で売られている中央アジアメロンの哈密瓜(ハミウリ)



カザフスタンの野菜研究所、玄関の表札。左側はキリル文字、右側はロシア語で研究所名が記されている



日本の援助で建設されたウズベキスタン・タシケントの種子貯蔵庫。メロンの種子は十分乾燥させれば寿命は比較的長い。タシケントは夏は暑い、冬は低温で種子の発芽率は低下しにくい



中央アジアのメロン早生と中早生種



タシケントの市場風景



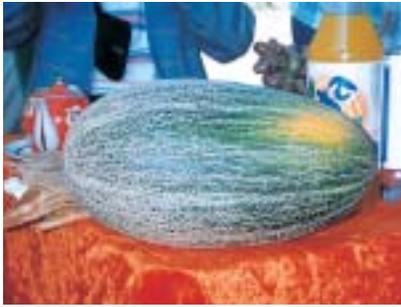
タシケントの市場には多種多様な中央アジアのメロンが集積されている



タシケントに向かう道路際に、運搬トラックを待つメロンが並べられていた。いずれも中生種



市場のメロン売り場にて。中生種



晩生種。
20kgを超えるものもあり、畑では成熟せず、
収穫貯蔵中に食べられるようになる。
10月に収穫して4月まで貯蔵が可能である



中生種。中生種は、播種後120日ぐらいで収穫される。
果重は5~8kg、糖度は14~16ぐらいである



早生種。播種後90日ぐらいで収穫できる早生種は、
果重は1~2kg、糖度は12~14



ウズベキスタン・タシケントのナボイ劇場。
第二次世界大戦後に捕虜となった日本兵がソ連に抑留され、
一部はタシケントに送られこの建物をつくった。
1966年の大地震のとき、この建物のみが倒壊せずに残り、
この辺りでは今日でも日本人の評価が高い



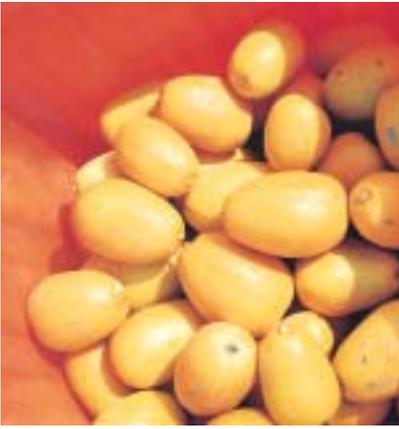
ウズベキスタンの野菜・ジャガイモ研究所。
中央アジアのメロンの研究センターとなっている



トルクメニスタンのアシドのモスク。
ソ連が崩壊し、独立した記念に
サウジアラビアから
寄贈されたものである



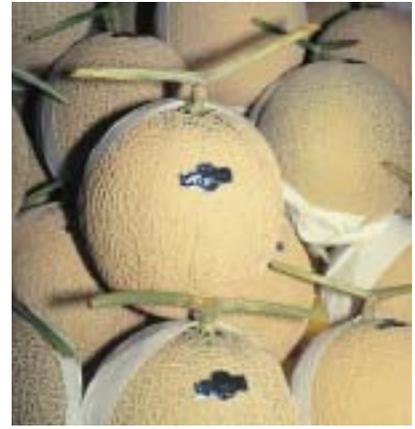
タシケントに戦後抑留され、
日本の土を踏むことなく
亡くなられた人々の墓地。
現地の人々の日本人への
感謝の念は強く、
墓標には花が絶えることがない



マクワウリ。品種名は黄金。
かつては日本のメロンの主役だったが、
現在は見当たらなくなった



ヨーロッパカンタロープ。
この遺伝子は品種改良によく使われている



アールス。イギリスの温室メロンを用いて
日本で改良した品種。表面のネット上の模様が美しい。
きわめて高価なメロンだ



アムス。現在日本では、
トンネルハウスメロンとしてよく知られている



温室メロン。アールス型。
「ちょんまげ」と俗称される。
アールスより表皮のネットの模様が細かいのが特徴



プリンスメロン。
マクワウリとヨーロッパカンタロープのF1(雑種第1代)。
現在のメロン改良の火付け役となった



小アジアメロン。中近東から北アフリカ・イベリア半島にかけて分布している。
果形・果色は多様で、かなり大型



アラビアメロン。細長く大きく湾曲するタイプのもelon(別名、スネークメロン)。
シロウリと同様、若い果実を生食する

Tomoya Akihama アグリバイオ研究所
〒206-0011 東京都多摩市関戸1-1-5
ザ・スクエア A310 Tel&Fax 042-372-5365
e-mail : akihamat@d9.dion.ne.jp